

## エペソ人への手紙5章1-20節 「聖徒にふさわしい歩み」

### 1A 愛のうちに歩む 1-7

#### 1B 献げる愛 1-2

#### 2B 貪り 3-7

### 2A 光のうちに歩む 8-14

#### 1B 暗闇を明らかにする光 8-12

#### 2B 光といのち 13-14

### 3A 知恵をもって歩む 15-20

#### 1B 機会を生かす 15-17

#### 2B 感謝と賛美 18-20

## 本文

エペソ人への手紙5章です。私たちは、4章から「歩む」ことについて見ていっています。召しにふさわしく歩みなさい、という勧めから始まり、4章17節からは、「異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。」と勧めています。キリスト者は、変えられていく生活を歩んでいると言っているですね。神を知らない時の古いやり方ではなく、キリストを知ったのだから、その新しい性質に合わせて生きていきます。そして、5章においては、変えられるだけでなく、自分を通して人々が変わっていく、影響を与えていく人生を歩むのだよ、ということと話しています。私たちは、世から影響を受けてしまう危険がいつもありますが、そうではなく、むしろキリストにあって影響を与えていくのだということです。「あなたがたは、世の光です。」とイエス様が言われましたね。光は照らすからこそ意味があるのであって、隠すものではないです。そして照らされたものは、影響を受けないでいることはできなくなります。

### 1A 愛のうちに歩む 1-7

#### 1B 献げる愛 1-2

<sup>1</sup>ですから、愛されている子どもらしく、神に倣う者となりなさい。

「ですから」とありますから、これは4章からの続きですが、「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。」という勧めをパウロは、最後にしていますが、それは、「神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださったのです。」ということです(32節)。神が、キリストにおいてあなたがたを赦したのだから、あなたがたも赦し合いなさいと勧めています。神を基準として生きていきなさい、ということです。

愛されている子どもは、父を真似しますね。愛されていなければ、父は反面教師となりますが、

愛されているので、自ずと真似をします。やはり、子は父に似てきますね。私も、父の仕草を見ると、自分がこの人の息子だと分かる瞬間があります。ここが、パウロが、「神に倣う者となりなさい」という所以です。私たちは、完全な神に倣う者となることなど、到底できないと思います。けれども、愛されていることを知れば知るほど、この方に似てきます。

イエス様が、敵をも愛しなさい、迫害する者たちのために祈りなさい、と言われました。その時に、イエス様は、父ご自身のことを話しておられます。「マタ 5:45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」太陽が悪人だけに隠れることはないですね。雨も悪人だけに降らせないということはありません。ですから、私たちは、敵であっても、悪を行っている人たちに対しても、親切にします。

<sup>2</sup> また、愛のうちに歩みなさい。キリストも私たちを愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえとし、芳ばしい香りを献げてくださいました。

異邦人のように、むなしい心で歩んではなりませんという勧めの次にあるのは、ここでは、「愛のうちに歩みなさい」であります。その愛は、キリストのうちに見いだされるものであって、「ご自分を神に献げた」というところにあります。旧約のいけにえの制度の中に、牛や羊を祭壇に捧げて、火で焼き、その香りを神がかいで、そのいけにえを快く受け入れられるという教えがあります。このように、愛するということが、自分自身を献げるというところに現れているのです。

## 2B 貪り 3-7

<sup>3</sup> あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、淫らな行いも、どんな汚れも、また貪りも、口にすることさえしてはいけません。<sup>4</sup> また、わいせつなことや、愚かなおしゃべり、下品な冗談もそうです。これらは、ふさわしくありません。むしろ、口にすべきは感謝のことばです。

愛のうちに歩むことの後に、これら淫らな行いについて、口にすることもしてはいけないと強く戒めています。これはなぜか？淫らな行いは、貪りであり、自分自身が受けて、自分が奪い取ることだからです。「愛」と呼ばれることがあります。淫らな行いは、キリストにある神の愛とは正反対だということがわかります。神の愛、キリストの愛は、献げることです。ですから、性の営みも、互いに従うことを誓い合っている結婚の中で祝福されます。これは次回、5章 21 節以降で学びます。

「聖徒にふさわしく」とありますが、私たちはみな、聖め別たれた者たちです。多くの人がいる中で、聖なる神にご自分のものとして選ばれ、召された者たちです。ですから、世には生きているのですが、世に属していません。混じり合うことがないのです。

それで日常生活にある、いわゆる下品な冗談、下ネタのようなものも、そして私たちキリスト者の会話の中では、このような話題も避けなさいと命じています。当時の社会では、あまりにも当たり前に行われていたけれども、あなたがたの間ではいけません、とパウロは言っています。今も、あまりにも当たり前に行っています。けれども、どんなに当たり前に見えても、「このくらい、いいじゃない」と思っても、してはいけません。

そして、以前学んだ、古い人を捨てて、新しい人を見につけなさいという勧めを思い出してください。下品な言葉を避けるだけでなく、それを捨てるだけでなく、新しい会話を身に着けます。それが、「感謝のことば」です。私たちが互いに、感謝であることを語ること、これが身に着くといいですね。

<sup>5</sup> このことをよく知っておきなさい。淫らな者、汚れた者、貪る者は偶像礼拝者であって、こういう者はだれも、キリストと神との御国を受け継ぐことができません。<sup>6</sup> だれにも空しいことばでだまされてはいけません。こういう行いのゆえに、神の怒りは不従順の子らに下るのです。

淫らな行い、汚れは、貪りから来ており、そして貪りは、偶像礼拝であることを、パウロは、はっきりと言っています。神ではないところに、愛や情熱を注ぐことが偶像礼拝ですが、貪りはこれらのことを行うので、偶像礼拝です。

そして、これらのことを行う者は、「キリストと神との御国を受け継ぐことができません」と言っています。パウロは、これに反論する人たちがいることも見据えて、「空しいことばでだまされてはいけません」と言っています。誤解も、特別な解釈も不必要で、これらの行いは、神の御怒りを引き起こすのです。

ただ、もちろん、これらのことを行ってしまった人が、そのまま神の国を受け継ぐことができないということではありません。これらのことを行っているのが、その人の特徴になっている、生活スタイルになっている時に、「淫らな者、汚れた者、貪る者」と言っていますね。「だったら、時々、これらのことを行ってもいいのね。」と思ったら、その考え自体が、危ういと言えます。御怒りをもたらすようなものであれば、自分自身は何としても離れたいと願います。

良心を清く保っていることの大切さは、ヨハネ第一の手紙にあります。3章 19-21節です、「19 そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。20 たとえ自分の心が責めたとしても、心安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。21 愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」主のみこころを行っていれば、主の前にいても心安らかでいられます。みこころを損なっていたら、それで心が責めますが、主の救いは私たちの心よりも大きな方ですから、救いがそれで失われるということはありません。けれども、自分自身の確信が揺

らぐのです。主の前に出るのは恥ずかしいと思うようになります。良心に傷がつくからです。これはちょうど、自分の受けた傷が主にあって癒されて、かさぶたになっているのに、そのかさぶたをはがして、いじくっているようです。癒やしていただくのであれば、完全に癒していただきましょう。

<sup>7</sup>ですから、彼らの仲間になってはいけません。

これら淫らな行いに、またこれらの会話に関わってはいけない、ということです。もし、こういったことに関わらないと、その人に福音を伝えることができないではないか？と思われるかもしれませんが、けれども、それは自分自身が影響を受けても、自分が影響を与えることはないのです。そこで次に、光と闇の対比について話します。

## **2A 光のうちに歩む 8-14**

### **1B 暗闇を明らかにする光 8-12**

<sup>8</sup> あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。

「愛のうちに歩みなさい」に引き続き、「光の子どもとして歩みなさい」と勧めています。その根拠は、「あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。」であります。主が、闇であったのを光にしてくださったのです。主が、私たちを一新してくださいました。

光と暗闇は、決して混じることはありません。光が来れば、暗闇は光になります。光がなくなれば、そこは暗闇になります。そこでパウロは言いました。「2コリント 6:14 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。」不信者と信者は混じり合わないのです。

しかし、それは繰り返しますが、不信者と接触しないことを全く意味していません。いや、もっともっと関わっていくべきです。光だけが暗闇に影響を与えます。暗闇が支配するのも、そうでないのも、光がその光を消すか、消さないかにかかっています。多くの人は、自分の周りの人にいかに信じてもらえるかに躍起になります。けれども、それよりもっと大事なものは、自分の内にある光をきちんと灯しているかどうかなのです。イエス様のことを伝えても、イエス様のように生きていないのであれば、周りから見透かされているのです。

そして、光を光として保っているからこそ、相手に影響を与えることができます。イエスご自身が、罪人や取税人たちと食事を取られました。共に親密な時間を過ごしました。しかし、影響を受けたのはイエス様ではなく、罪人や取税人たちでした。彼らが主の御言葉を聞くために集まり、そして主の御言葉を聞いて悔い改めました。その反対ではなかったのです。ですから、私たちの歩みは、光が暗闇を照らす働きなのです。多くの人がこれを隠してしまおうとします。迫害を恐れたり、相手

がどう思うか考えすぎてしまうのです。けれども、隠してしまい、自分と不信者との関わりに暗闇が支配するようなことがないように、気をつけなければいけません。

<sup>9</sup> あらゆる善意と正義と真実のうちに、光は実を結ぶのです。

光は、しばしば、知識の意味として使われますね。光が与えられたというと、他の人々の知らない知識が与えられたというように使います。これは、グノーシス主義のような見方です。他の人々には知らない、隠れた知識が与えられて、光が与えられたとするのです。けれども、聖書では、光の結ぶ実は、「善意と正義と真実」であります。良いことです、正しいこと、そして本当のこと、真実なことです。

<sup>10</sup> 何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい。

私たちの行動が常に、主を喜ばせているのかどうかという基準です。しばしば、これをするには正しいのか、正しくないのかという質問をいただくことがあります。その質問の背後の動機には、「なるべくこのことを行っていきたい。」という、ぎりぎりの線までそのことをやっていきたい、神に是認してほしいと思うことがあります。けれども、いかがでしょうか？誰かを喜ばせる時にそのような基準で動くでしょうか？旦那さんが、奥さんのために花束を用意する自由もあるし、そうではない自由もあります。そこには規則がありません。けれども、もし奥さんを喜ばせたいと思う時に持つていくことがあるでしょう。そこは正しいか正しくないかではなく、喜ばせたいという動機です。

同じように主に対して、このことを行なうのは主に喜ばれるのかどうか？という動機であるべきです。あることは別に行わなくてもよいものです。けれども、主の心に適ったことを、神に愛された者として喜んで行いたいと願うはずで。

<sup>11</sup> 実を結ばない暗闇のわざに加わらず、むしろ、それを明るみに出しなさい。<sup>12</sup> 彼らがひそかにやっていることは、口にすることも恥ずかしいことなのです。

エペソなど、当時のギリシア・ローマ社会で行われているものには、神々との交流の中で、魔術や麻薬、性的乱交などの行いがありました。そういったことは、一見、魅力的に見えますが、やっていることは、実に恥ずかしいことなのです。これらのことがいかに恥ずかしいことで、空しいことなのかは、主にあって見ていく時に、なおのことはつきりします。

同じことをパウロは、ローマ人への手紙で話していました。「6:20-21 あなたがたは、罪の奴隷であったとき、義については自由にふるまっていました。21 ではそのころ、あなたがたはどんな実を得ましたか。今では恥ずかしく思っているものです。それらの行き着くところは死です。」キリスト者

になって初めて、何と恥ずかしいことだったのだろうかと気づくということです。

ここロマ書でも、エペソ書でも、これら暗闇のわざは、「実を結ばない」と言っていますね。私は、信仰を持つ前、大学にキリスト者のサークルがあるのを知って、ちょっと心の中で見下げていました。「こんなことやっていて、何か実のあることできているのかね？」では、自分たちはどうなのか？ということなのです。暗闇のわざを行っていました。彼らは、商取引の時や、商人の組合の時とか、いろんところで、偶像礼拝と不潔な行いが伴ったわざを行っていますが、そうしたところ実を結んでいるのでしょうか？いいえ。キリスト者は、善意、正義、真実における実を結びます。例えば、病院というのは、ホスピスという、巡礼者を泊める宿から、病人を介護するところへ変わったところから始まっています。そして学校も、キリスト者によるものが数多くあります。キリスト者が人口1%にも満たない国で、日本の病院や大学でキリスト教系のものは、かなりの割合です。

ここでの「明るみに出しなさい」というのは、悪いわざを暴露するような、裁くようなものではありません。それらの、良いこと、光のわざを行っている中で、いかに、周りの人で自分たちのことを悪く言う人たちがいても、恥じ入るようになるということです。「I ペテ 3:16 ただし、柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの善良な生き方をののしている人たちが、あなたがたを悪く言ったことを恥じるでしょう。」

## 2B 光といのち 13-14

<sup>13</sup>しかし、すべてのものは光によって明るみに引き出され、明らかにされます。<sup>14</sup>明らかにされるものはみな光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ、起きよ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストがあなたを照らされる。」

このようにして、明るみに出されて、いのちが与えられるという働きは、神ご自身の全体の救いのご計画の中心にあるのだということがわかります。午前礼拝でお話しました。神は、第一日目に光よあれ、と言われて光を造られました。そして、その後、もろもろの命を造られました。同じように神は光であられ、暗闇の中で死んでいる者たちを霊的に生かし、そして光の中に招き入れられるのです。

「明らかにされるものはみな光だからです。」とあるように、眠っている人、闇の中にいる人たちが、光によって裁かれるのではなく、むしろキリストのところに来ることによって、光になるのだということです。最後には、光に照らされて、闇の中にいる人々は燃える火に裁かれるのですが、へりくだって悔い改める者たちには、光の中に招き入れられる恵みがあります。

## 3A 知恵をもって歩む 15-20

このようにして、私たちは世の光として生きていくように召されているのですが、そこで必要なの

は知恵であります。「愚かなおしゃべり」という言葉があり、また、「むなしいことば」というのもありました。目的がなく、時間を無駄に過ごしているのです。しかし、キリスト者は、真逆の生き方を求められています。そこで、知恵のある人のように歩みなさいと勧められています。

### 1B 機会を生かす 15-17

<sup>15</sup> ですから、自分がどのように歩んでいるか、あなたがたは細かく注意を払いなさい。知恵のない者としてではなく、知恵のある者として <sup>16</sup> 機会を十分に活かみなさい。悪い時代だからです。

主のために生きることが、とても難しい時代に今はなっています。パウロが、「悪い時代だから」ですと言っています。これは、不法がはびこり、また迫害も起こるような時代だということです。そのような中で、私たちは、自分に与えられている光をいかに人々に輝かせるかには、知恵が必要であります。主が弟子たちに言われた言葉を思い出します。「マタ 10:16 いいですか。わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。」蛇のように賢くありなさい、とイエス様は言われます。

主のために、与えられている機会を十分に生かすべく、知恵を主から求めてください。ある人は、試練が与えられているかもしれません。しかし、その試練の中で信仰をもって忍耐していく中で、周りの人々に証しを立てることができます。主にあって、自分のしようとしていることが、妨げられているように見えても、実はそのような時に、主が大きな働きをすることもあります。例えば、パウロは、ローマで牢に入れられました。しかしパウロは、喜んでいました。なぜなら、カイサルの親衛隊の者たちの間に、キリスト者が次々と起こされて行ったからです。彼は機会を逃すことはありませんでした。悪い時代にも、主のみこころを行う機会が失われるのではないのです。

<sup>17</sup> ですから、愚かにならないで、主のみこころが何であるかを悟りなさい。

時代が困難になると、悪くなっていくと、愚かな行動を取ってしまいます。落胆したり、傷を受けたり、失望したり、そういったことが重なると、信仰から離れるという愚かなことをしてしまいます。そうではなく、むしろ、そういった困難の中で、主のみこころは何であるかを知っていくのです。

### 2B 感謝と賛美 18-20

<sup>18</sup> また、ぶどう酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。

愚かな行動の一つに、酔いしれるということがあります。箴言には、強い酒に酔うことについての愚かさが書かれています。ある人たちは、「お酒を飲んでもいいではないか。イエスも、カナの婚礼で水をぶどう酒に変えられていた。」と言います。しかし、「そこには放蕩があるからです」と、

パウロは、はっきりと書いているのです。しらふであれば、決して行わないようなことを、酔いしれると平気で行います。また、愛によって歩んでいません。しらふであれば、自分よりも他者に気づかうことができますが、酔いしれると、周囲の人々のお節介になります。放蕩があるのです。

しかし、パウロは、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着なさいという勧めをしていたように、ただ、ぶどう酒に寄ってはいけない、と言っているのではなりません。お酒以上に、すばらしい、お酒で求めているようなことが、完全に満たされる手段があることを教えています。それが、「御霊に満たされなさい。」です。お酒を飲む理由は、自分の生活で嫌なことがあり、苦しくなっているからです。そして、心に空白があり、それを埋めたいからです。考えたくないのに、アルコールの影響でその間だけでも考えなくなります。

しかし、御霊に満たされることによって、心の奥底から生ける水が流れ出るようになります。御霊によって思いも心も支配されるので、アルコールに頼って支配されなくてよくなります。私たちが苦しくて、うめいている時に、御霊は言葉に言い表せないうめきをもって、私たちのために執り成してください。そして何よりも、御霊は知恵の御霊です。私たちが知恵をもって歩むことができるようにしていただきます。

<sup>19</sup> 詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌いなさい。

御霊に満たされる時に、私たちの活動は、ここにあるようなことです。詩、賛美、霊の歌をもって互いに語り合うことです。御霊が働かれる、導かれるままに、歌うのです。そして、そこには預言があるでしょう。異言もあるかもしれませんが、けれども解き明かしもあります。カルバリーチャペルでは、「アフターグロー」と呼びますが、名称はどうであれ、御霊の導きの中で、与えられた歌や言葉をもって、励まし合い、慰め合い、祈り、語り合うのです。そして、主にに対して心から賛美し、歌います。私たちの心が御霊に触れられます。そして、心の奥底から癒しを受け、慰められ、希望を新たに抱くことができます。

<sup>20</sup> いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって、父である神に感謝しなさい。

賛美だけでなく、すべてのことについて、父なる神に感謝します。賛美している時に聖霊で満たされ、感謝している時に聖霊で満たされます。そうした中で、私たちは賢く生きることができ、悪い時代にも、何がみこころかをわきまえ知ることができ、光として生きることができるのです。ぜひ、集まることを怠らないでください。不信仰、疑いの心が出て来て、罪を犯す感わしを受けてしまいます。かの日、主の来られる日が近いのですから、ますます私たちは愛と善行に励むように、互いに勧め、注意していきたいと思えます。